

タイ社会における「障害者」とその生活変容に関する研究

平成 17 年度入学

派遣先国：タイ

吉村 千恵

キーワード：タイ，タイの障害者，障害者の生活，制度と障害者，障害者観

対象とする問題の概要

かつてタイにおいて、「障害者」の指示語は、各障害状況に応じて様々であった。しかし、1990 年代以降、制度上も社会的にも障害者全般を称して「*khon phikan*」と表現することが一般化し、障害者が自らを「*khon phikan*」と名のる例も増えた。それら呼称の変化は、社会における障害者の位置づけが変化したことを示す。その背景には、制度的な背景とともに国際機関や世界的な障害者運動の活動展開も挙げられる。

タイにおける障害(者)の定義や、社会と障害者の関係などは、時代や社会の状況によって変化している。つまり障害者は、社会との関係性において創り出されると言える。また近年では一部の障害者が自らのアイデンティティを主張した活動を展開している。いずれにせよ、障害(者)の存在に注目することは、タイ社会が、その姿形や所属などによって人をどのように位置づけてきたのかを見る手立てとなる。これはタイの地域研究を行う上で重要な視点を提供するが、彼らの生活や障害者観について言及された研究は皆無であり、急激な変容を遂げているタイ社会における障害者の生活や社会関係の変容も明らかにされていない。



登録者に発行される
障害者手帳

研究目的

現在の研究の大きな目的は、まず現代タイ社会で暮らす障害者の現状を明らかにすることである。タイにおいて障害者は地域のなかで一定の割合で存在しており、その可視性は高い。地域の中で暮らす障害者の生活や地域の人々との関係性を明らかにする。そのうえで、歴史や文化、政策などを背景として「障害をもつ」ことの意味及び障害者の生活や障害者自身の自己認識などの変遷を、障害当事者の視点から明らかにすることを目指す。

そのための前提として本調査においては、現在進行中の障害者をめぐる障害種別ごとの活動展開について明らかにする。障害者といっても、その状況は障害者種別によって異なる。生活ニーズも異なり、時には相反する。それでも各リーダーたちは、全員が自ら「*khon phikan*」と名のり、共通の社会的ニーズを抱える者として社会のなかでの一定の位置づけを図ろうとしている。よって本調査では、以下の四つの目的を掲げる。

①聴覚障害者の活動に参加し、団体関係者への聞き取り及び参与観察を行う。②聴覚障害者と身体障害者の障害種別を超えた活動について参与観察を行う。③今後の調査のためのネットワークを構築

する。④これまでの活動展開を知るための資料収集を行う。

本調査の成果は、タイの障害者の全体像を知る上で重要な足がかりとなると考える。

フィールドワークで得られた新たな知見

今回のフィールドワークでは、資料収集と聞き取りを行った。資料として、政府が発行する統計や、障害者に関する先行研究、個人史などを収集した。また聞き取り調査では、①聴覚障害者と②クロスディスアビリティーズ（障害種別を超えた障害者同士の相互理解と全般的な障害者問題に協力して取り組もうとする動き）の二つに焦点を当てた。

聴覚障害者は、他の障害者とは異なり、手話や読唇以外にも多様で特有のコミュニケーションツールを持ちニーズも異なることから、独特の生活形態や価値観を形成しており、その生活は「ろう文化」と表現される。彼らとの対話には手話または筆談が欠かせないことから、彼らを対象とした短期間の調査は難しいと考えていたが、今回は、講習会参加という形で彼らの活動に接することが出来た。

現在、聴覚障害者は、政府の統計によると、タイ全国に約 39 万人いる。そのうち共通言語としてタイ語手話使用者は約 70%である。手話能力の有無に関わらず、聴覚障害者の多くは、健聴者であるその家族や地域の人々と、独自の方法で意思疎通を図っている者が多い。今回の調査では、手話を使って生活している障害者と、これまで家族とは独自の身振りで意志の疎通を行ってきたが、最近になって手話を覚え始めたという障害者の両方及び彼らの家族に出会うことができた。



片麻痺の障害者に手話を教える

また、異なる障害種別同士の交流の場にも参加することができた。

そこでは身体障害者に対して聴覚障害者が手話講習会を開催していた。その場に集まった聴覚・身体障害者の両方が、それまで互いの障害への理解がなされてこなかったことを認めた上で、相互のコミュニケーションの方法の一つとして手話講習会を開催するに至ったと説明した。その場にいた聴覚障害者が自身の障害を文化だと表現したことは興味深かった。他の障害者に対して自身の障害をいかに説明するのか、また障害者同士がどのように交流するのかなどを観察する良い機会となった。同時に、私も初級タイ語手話を学ぶことが出来たことは大きな成果であった。

今後の展開・反省点

今後の調査は、今回の短期調査で収集した情報や形成したネットワークに基づき展開していく。また、書籍や論文に加えて障害者グループや個人が所有する内部資料も可能な限り収集し整理していく。

さらに、今回は団体を中心として活動する障害者個人に聞き取りを行ったが、今後の調査では団体とも一定の関係をもちつつも、さらに別の方法で、どこの団体にも所属していない障害者にも聞き取りを行いたい。

反省点としては、語学力がまだ十分ではなかったため、資料や論文などを読むのに時間がかかり、質問をその場でできなかったことなどが挙げられる。また、障害名や病名などの専門用語を十分に習得していなかったため、何度か聞き直したり説明してもらおうという場面があった。よりスムーズな調査のために、必要な専門用語を早急に覚え、コミュニケーション能力の向上を図りたい。



マヒドン大学地域開発のための言語と文化研究科

加えて、調査が連日にわたる間、記録の整理が行えず、後日一部混乱した。今後は記録の整理方法を工夫したい。